

病院や親子に共感

小児在宅医療をテーマに3日まで連載した「家で暮らせる 小児の在宅医療」に、読者から多くの反響をいただいた。札幌市で小児の訪問診療に取り組む医療法人「稲生会」(手稲区)の医師やスタッフが奮闘する様子、難病や障害を抱える子供と向き合う親の姿に、共感したり支援の必要性を感じたりしたという声を紹介する。

(報道センター 門馬羊次)

生
病
家で
暮らせる

小児の在宅医療

反響編

◆ 枠を超えた手助け支え ◆ 社会の理解深まっつて ◆ 奔走する医師に感動

「在宅で療養している子供や家族が、みんな一生懸命頑張っていることを知れて、うれしかった」。ファクスで感想を寄せてくれた出石見沢市の主婦古谷和世さん(34)は、その語る。

古谷さんは昨年4月に長女を出石見沢の病院で出産した。意識が無く仮死状態で生まれたため、札幌の病院に転院。新生児集中治療室(NICU)で3カ月過ごし、その後も人工呼吸器を着けた入院生活が続いた。出石見沢の病院が訪問診療で支えてくれることになり、在宅療養を決定した。長女は今日11日、ようやく自宅に連れ帰ることができた。夫と息子2人と共に家族をのりつての新生活がスタートした。「娘がいつでもそばにいてくれることがうれしい」

在宅療養が始まる前には病院が呼びかけ、医療、福祉関係者や古谷さんの近所の住民も交えて受け入れ態勢について話し合った。「近所の方が『除害は手伝うよ』と言ってくれるなど、本当にありがたい」。医療の枠を超えた支援が在宅療養の支えになるという。

札幌市の主婦長嶋子(みさこ)さん(68)は、言語障害のある子供の親を対象とした相談員を約40年続けており、記事への感想を手紙で寄せてくれた。長男が唇や口の中に割れ目のある「口蓋裂」だったことから、その経験を踏まえて相談に乗っており、「病气や障害への社会の理解が深まれば、支援も進んでくれるはず」と話す。

障害児の親ではなくても、子育て世代には共感が広がった。札幌市厚別区の主婦(53)は「自分も3人の子育てをしているが、風邪をひいて病院に連れて行くだけでも大変。小児の訪問診療の事情は記事で初めて知ったが、在宅医療がもっと広がってほしい」と話す。

4歳の一人息子を子育て中の厚別区の会社経営の男性(49)は連載2回目、2歳で他界した札幌の岩野未来ちゃんと両親が心を通わせる様子が印象深かったという。「親と子が向き合う姿や、子供を守るために奔走する医師の努力に感動した。朝刊を読んでも仕事に向かう時、『子供のために今日も頑張ろう』と思えた」と振り返った。